

ほのぼの

第52号

令和元年

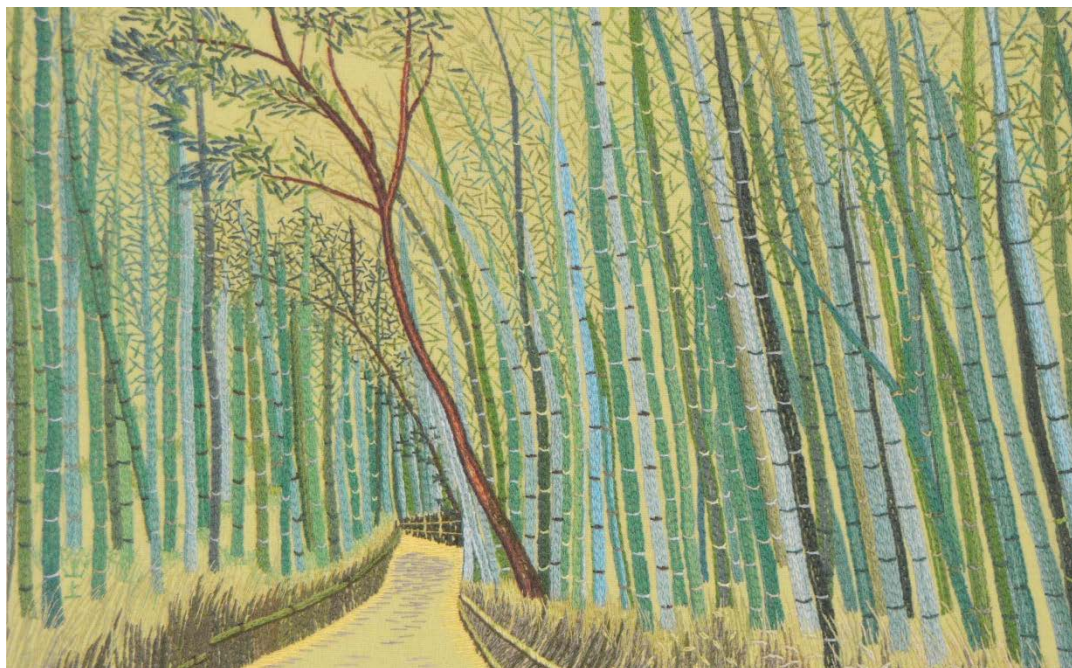
7月

発行

信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3

TEL.078-732-5209



「人のやさしさ」

住職

「年々歳々 花あい似たり 歳々年々 人同じからず」と言います。これまでいつもできたことが今日もできる。いつものように目が覚めて、いつものように動けて、おいしく食べられる。それにいつもの人にも逢える。この世においてこれほどすごいことはないの、何故か私たちには「歳々年々 人同じからず」ということに気づきにくいようです。失ってはじめてこのことが実感できるのは悲しいことです。

今年の正月、わたしは風邪をひいて声が出なくなりました。病院へ行き診てもらうとひどく炎症をおこしているとのこと。薬の力でいくらかは落ち着いてきたけれど、なかなか元に戻らない。手術ということでした。手術後一週間は声を出さないようにという医師の指示で、字を書いて会話する「筆談」でした。字を書いて相手に自分の意思を伝えるわけですから、声を出しての会話のようなわけにはいきません。う

まく伝わらないもどかしさの一週間でした。また、普通に話せることの有難さを知らせてもらえる一週間でもありました。

私たちの身体は五十兆とも六十兆ともいわれる細胞で形成されているといわれます。それが七十数年間順調に働いていることの不思議さを思いますとともに、健康な体を恵まれたことに感謝するばかりです。しかしこれも「のど元過ぎれば」なんとやら、その気持ちも薄れて忘れてしまいそうです。

人は「老い」を受け止めたくありません。しかし、「老い」は止まらない。

新聞の「人生案内」欄に「長生きは幸せなのか」というのがありました。「時々、老人ホームでお手伝いをしています。私の九十代の母親も、ホームの方々も、若いころならできたことが徐々にできなくなります。そんな姿を見るにつけ、何のために生きているのかと感ずるようになりました。〈人生百年〉と近頃よく言われますが、少しもうれしくなくゆううつになります。近くに義理の両親がいます。軽い認知症の義父を義母

が介護していますが、たびたび「早く死んでくれ」と口走り、長生きとは迷惑なんだと思えてしまいます」と。六十代前半で、いろいろな面で恵まれた人生を送った」というご婦人の言葉です。善し悪しは言えませんが、「老い」を見る考え方の一つです。

この人とは逆の考えで生きられた方がおられます。百歳で往生された義理の母を心を込めて世話をされ最期をみとられた人がいます。

Aさんは義理の母を見送られたとき「もう少し生きておってほしかった」とおっしゃいました。なかなか言える言葉ではありません。Aさんの腕の中で往生されたそうです。息の切れる前にAさんの手を二回握ったそうです。〈長い間お世話になってありがとう〉の気持ちをお嫁さんに伝えたのでしょう。

〈人は人を救うことはできないと思う。しかし、救う手助けは出来る〉と言われた人もおります。人は「群れを組んで」生きています。なにが必要か。〈やさしさ〉です。「お念仏」は、やさしさを生んでくれます。

合掌



花まつり

四月四日（木）に花まつりを勤めました。いたやど保育園の園児さん、門信徒のお子さんなど約六十名が参加しました。一人ひとり花御堂のお釈迦様に甘茶をかけ



て手を合わせ、コップの甘茶を頂きます。そして、献花献灯に続いて、本年は、マジックやなぞなぞおはなしコーナーで盛り上がりました。園児さんは、「ちようちよ」「メダカの学校」を元気な大きな声で歌ってくれました。そのあとは、門信徒の皆さんと、腕相撲ゲーム、的当て、玉入れの遊びを通して交流しました。

このような子供のころの花まつりの楽しい体験が記憶となり、成長されても思い出となってくれることを願っています。保育園の園長さんからも地域



との交流として、毎年楽しみにしていると話がありました。園児の皆様には、小さなお菓子の袋詰めと手作りのこまをプレゼントしました。

第十八回 門信徒会定期総会

平成三十一年四月二十七日（土）信行寺門信徒会定期総会が行われました。

新田泰三会長挨拶の後、平成三十年度事業報告、会計報告がありました。そして、今年度は、大幅な役員改選がありました。新役員から、三十一年度事業計画案、会計予算案の提案があり、承認されました。

今年も多田清子さんが、昨年好評だった手作りの陶器の小皿を寄贈してくださいました。参加者の皆さまにお配りしました。

今回、ほのぼのと一緒に新役員名簿と会計報告を添付させていただきます。確認ください。

今年度も門信徒会の各行事に参加のほどよろしく願います。



糸で描く刺繍画

山上雅子

この三月二十三日から四月四日まで、信行皆様のご厚意とご協力により、礼拝堂で「刺繍画展」を開催させていただきました。また、本当にありがとうございました。また、多くの方々に暖かいお言葉もかけていただき、大変感謝しております。



私は若い頃から様々な手芸に取り組み、刺繍は六十年近く続けてまいりました。手刺繍は一つの作品を仕上げるのに長い時間がかかりますが、図柄を考え、刺し方や配色を工夫していくことは、何より創りあげる喜びを感じさせてくれます。ここ三十年近くは毎年開催される美術展に出品するため、五十号額以上の比較的大きな作品を中心に「刺繍画」を制作してまいりました。

信行皆様とは十九年前に夫が急逝してからずっとお世話になっております。急逝直後は「南無阿弥陀仏」の六字の名号を刺繍で一針一針刺していくことにより、少しずつ心の落ち着きを取り戻すことができました。

傘寿を過ぎましたが、次はどんな作品を創ろうかと、いつもわくわくしながら考えております。また今回の刺繍画展をきっかけに、若坊守様に撮影のご協力をいただきながら、作品の写真集を作成することも一つの目標となりました。これからも元気に、新たな作品制作に挑戦し、少しでも沢山の皆様に楽しくご覧いただきたいと考えております。重ねて皆様に厚く感謝申し上げます。



表紙も山上さんの作品です。

七高僧シリーズ

「師主知識の恩徳・・・」 龍樹菩薩

副住職



親鸞聖人の他力念仏の教えは、師匠の法然聖人が直に説かれた「ただ、念仏して弥陀に助けられまいらすべし」という言葉につきますが、その教えの源は二千年五百年前にお釈迦様がインドで説かれた教えであります。そして、そのお経を学んだインド、中国、そして日本の七人の高僧を通して親鸞聖人に伝わりました。その教えの相承系譜を親鸞聖人は七高僧として正信偈や高僧和讃にあげておられます。今回は、そのうちの最初のインドの龍樹菩薩についてご紹介させていただきます。

龍樹菩薩（ナーガールジュナ）は西暦およそ百五十二〜二百五十年に南インドのベベラールという町にバラモン（インドの司祭カースト）の子として生まれました。少年時代はバラモンのヴェーダ聖典を学び成長しました。青年となり仏教以外の様々な学問に精通していたナーガールジュナは出家して沙門となり、まず小乗経論を数か月で読破して体得します。その後、別の

経論をもとめて遍歴し、大瀧菩薩（マハーナーガ）より大乘經典の「般若経」を授かります。この般若経をもとにして展開される龍樹菩薩の代表的な著書が「中論」で、空の思想が説かれています。有と無の両極端の考えを否定し、現象として見えるものであっても本当は実在するものはなく、とはいえ空とは何も無い虚無論でもないことを説いています。つまり、全てのものはそれ自体で独立して実体をもって存在しているのではなく、様々な因と縁によって仮に生起しているにすぎないというように、空を縁起によって説明しています。このような龍樹菩薩の空の思想は中観思想として後の大乘仏教のもっとも根底となるものです。このように空性を悟る智慧の完成を目指すとともに慈悲を實現することこそが大乘の菩薩道だと説きました。

一方で、「十住毘婆沙論」の「易行品」において菩薩道を歩むことがいかに至難であるかを説き、凡夫が不退転の位に至る方便として、易行道である信方便の念仏が説かれました。菩薩としての行道を歩む以外にも、仏名を聞き、信じていく念仏の道がひらかれていることを示されたのです。仏道には難行道と易行道があり、難行道は陸路を歩いて進む苦しい道に、易行道は船に乘せられて行く楽な道に譬えられました。



法語カレンダー

今回は、本願寺出版社の法語カレンダー、
八月の言葉の説明をします

涅槃の真因は
ただ信心をもってす

極楽浄土に往生できるか
どうかは、ただ信心一つ
で決まる

この言葉は、「顕浄土真実教行証文類の信巻」に書かれています。

「涅槃（ねはん）」とは、すべての煩惱の火が消え去った安らぎの境地のことをいいます。サンスクリット語で、「ニルバーナ」といい、「吹き消すこと」という意味があります。そして、完全に煩惱を滅した状態というのは、

人の死であることから、涅槃は死と理解されるようにもなったのです。

親鸞様は、仏の悟りの極地ともいえる涅槃寂靜の世界に至る、つまり、極楽浄土に往生する真の因となるのは、ただ信心一つであると言われているのです。

正信偈の中に、「能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃」とあります。「信をおこして、阿弥陀仏の救いを喜ぶ人は、自らの煩惱を断ち切らないまま、浄土で悟りを得ることができ」という意味になります。

信を得て、大いに喜び敬う人は、ただちに阿弥陀仏の本願力によって、迷いの世界のきずなが断ち切られる。煩惱を断ぜずして、涅槃を得ることができるとおっしゃっています。

さらに、「信楽受持甚以難 難中之難無過斯」とあります。これは自分の力で信じることは実に難しい。難しいことの中でも、これ以上難しいことはないともおっしゃっています。阿弥陀如来の本願力ひとつで浄土に往生させていただくのです。

日頃の疑問を考えよう

Q

法要や儀式などでお寺にお参りする時、何を持っていけばよいのでしょうか？

A

そうですね。念珠や経本（浄土真宗本願寺派 日常勤行聖典）、式章もあるとよいですね。信行寺では、お貸しする経本も用意しています。

Q

念珠や経本はわかるのですが、式章を持っていないのですが、どのようなものなのですか？

A

下記の写真のように肩にかけているのが式章です。形が僧の着用する輪袈裟に似ていますが、厳密に言えば、袈裟ではありません。（袈裟をつけるのは、得度を受けたお坊さんに限られます。）門徒のマナーとして、仏前に対しての敬意を表す意味からつけます。



Q

念珠の持ち方に決まりはあるのですか？
念珠の持ち方は、宗派によって違います。浄土真宗であっても、大谷派は違います。浄土真宗本願寺派の持ち方は下記のよう

本願寺派



Q

うに両手に通し、ふさを下にして指はそろえて伸ばします。念珠は仏前に礼拝するときに欠かせない大切な法具で、一般的には数珠ともいわれます。数珠をそろばん代わりに念仏の回数を数えるために用いられることもあります。もちろん浄土真宗では、念仏の数を問題にしませんから、そのようには使いません。

A

いろいろなお経がありますが、ふだん家ではどのお経をお勤めするとよいのでしょうか？
「正信偈」は親鸞聖人のよろこびの偈（うた）です。蓮如上人によって、浄土真宗の朝夕の勤行と定められました。しかし、忙しい毎日、「正信偈」をお勤めすることは難しいことです。少し短い、「讃仏偈」や「重誓偈」をお勤めできるとよいでしょう。それぞれ仏説無量寿経の中にある有り難い偈文です。長い短いではなく、何より大切なことは、感謝のお勤めをさせていただくことです。

ちなみに浄土真宗では、「般若心経」をお勤めしません。理由は、自力の教えを説く内容なので、浄土真宗の教えに合わないからです。





信行寺行事予定とご案内



◇本堂納骨お盆法要

八月十六日（金）

午後二時より 本堂にて

◇夏期特別法座

八月十八日（日）

午前十一時から午後三時

信行寺 本堂・礼拝堂にて

◇秋の彼岸法要

九月二十一日（土） 天岸 浄円 先生

*法話の後、お齋を一緒に

二十二日（日） 住職

両日とも午後二時より 本堂にて

◇西大谷納骨参拝

十月二十日（日）

バスで一緒に参拝いたしますので、ご参加希望の方はお早めにお寺にお問い合わせください。

編集委員より

前夜からの雨も上がりさわやかな去る五月の日に、神戸文化ホールで報恩まつりの式典が行われました。神戸真宗連盟各寺院僧侶の方々と仏教婦人の皆さんで、親鸞さまのお誕生日をお祝いしました。その際、作曲家の平田聖子さんが講演されました。昨年京都コンサートホールで一緒に合唱した時以来のご縁で、一年ぶりの再会となりました。講題は「親鸞の心を音楽で」ということで、親鸞さまの和讃に曲をつけられたことについてのお話でした。今回も、素晴らしい旋律をピアノで演奏しながら、小柄な身体からパワフルで心に染み入る歌声を聴かせていただきました。昨年歌った曲を思い出しながら一緒に歌いました。会場全体が一体となって、平田聖子さんと皆さんの親鸞さまを讃える思いが溢れ、とても良い時間を過ごすことができました。今年も、気持ち良く親鸞さまのお誕生日を祝う会が執り行われた旨、ご報告させていただきました。

この度、編集員が一部入れ代わりしました。不慣れな事もあるかと思いますが、ご辛抱下さいますようお願い申し上げます。ぜひご意見もお待ちしております。

ホームページアドレス
変わりました。

hono. work